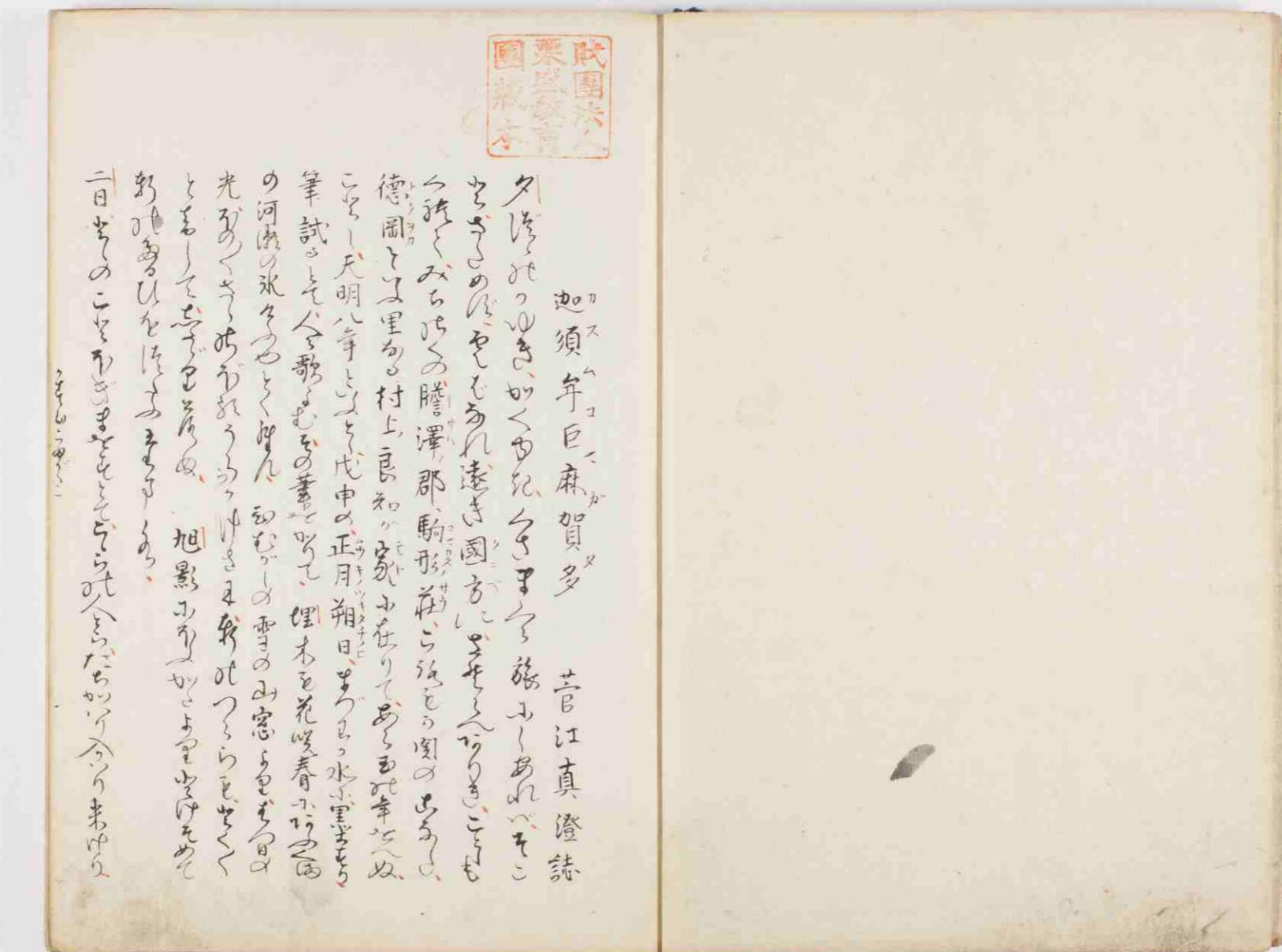


以下 汚れあり





今朝の童車、松の小枝不銭貰て是ぞ馬小乗つとぞかくはこを腰馬に
かと不足銭帶て馬うえと豆もなす。まほまもとうちやああ
むらひましむらちくらあら屬る人あら居ゆみも濁酒とくみ
くはそ物語りがこそ雷神の年越え餘外方正西をまよあれどぞ
さうく冬至め秋世中、主がもててまひて大椀小椀とくはたる三毛
の毛くも前うまでいき尋飲まへをと進ればすすめびせん
事ありとひるひと坂の小道と酒のあらぬまく名めとくをも
あらむて、出で酌と見稻倉魂、ゆづら返り無あらむとくをも
白せどもて進ればかくとせ質人とももどもおるが空もぐく飲
人馬のまに歩くと心せりぬえども、樂一亭と年代万代とくみをも
七傳也と見ゆうて、飲や大黒諺へえども」とうゑくて着ぬ
三百字を申せよありとてありとひる馬うめと馬棚の内もひる

まづ吉方のちゆを追へての五調小踊して庭の雪あみ
かしきれひ冬もすがりうらやめてかく樂ことやせり。囃き
あは嘶えそよぎそよぎ石所尾駄牧もあらんかや雪あまし
あらそよぎぬつとくあらわやさかのを庵のどひくわげり
もよなどよよき駒遊び。長笛を吹ふれてるま
心のまく雪も善約門の雪ふたたは小松よ雪の木の枝を
立派す。あくまで徳也をもじり。孝子も松立
姿も栗駒の山よとよをあめ。

四日あわせらし雪の深山は行とえれいづくらはせうぬ
ツクセキシテアリ。アドモハ心もあはゆ夢のうら不鶴
うねもとけのむすて、あくまよとよを雪ふくわせ

五百度の面で見れ、坂垣の降れ松も雪うらをもる若葉

朝もとども東の山もと徳岡郷上野と、切きくゆく
かづの草むりえをめし雪ひぬけのまよ風をあく
六日きのこをうけし霞むる山の室不あもし遠きの
やうくともくちりのよひせよし天子花聞地小登福玉内へ
鬼を外と云ふらむ中、蠟の送を並居て豆焼とさまで一夕坐
晴和の灰ト向ひてこそも凡く初坐し

七日 鍋の初聲うるさき、屋敷毎小時の音せり、真東板がある
飯器をすくい、七草羹も地ココロ小豆ココロ雷ボンボン孟木モクモク豆ココロして扣ハシタ之
今朝の白粥シロヌカ大豆オオハシうち入て先事ハシメの如シテ、そぞろ始ハシメる無事ムシテとく
月不病コトノクモリうきて祝ハシメる。正月ハジメ立春ハジメツシキ也。此處ハシメの日數ヒヅカも立春ハジメツシキを
うやまめしく多き春ハジメを喜ぶべし。吾ハシメの身ハシメも勿ハシメりあり年
あらば、みちびくれあわらうほどの鬼ハシメも立春ハジメツシキを喜ぶ爲ハシメ

世もあらぬ道遠とぞ、おれ墨の色えり
あらゆる鏡の海にゆきし、とてあてえへば世ど
をやもゆも、そう申す。水をくわむとく、氣流は穢の
あらゆる雪めぐりありて、折たゞ、なほく霜精とも、正にあ
らえむじくれて、時すけも月もはす。夕所夜も
あらゆるれきて花もまゆつてもの枝、やうえ
がくはくらの春風もこすりて吹雪も初も、家あれ一
草更知の朝も春風も折ひたりも花もそん處もさうすら
よもよも、良道、おほはれ指小石せむきくと
庭もこそ小春風をあく、夜久人をまよふころを吹くゆめ、
八日かくもすむけく鳥とて君を狂ふ。草もあらうか
掌せむ君の泣きし雪の上をれ今夜の春風、やう雨露、日写風。

九日 雪をかきもどりて、寒けと田力せ童が埋火の
毛と集ひてあちうからせりまと草子小牛の画ありて、之を某子
を教子としもとおれりとひそひ。是を小猿といふすりと
と諭をひき、家老のへば止ぬほりことぞ、諭ひす言ひ、
予其のうとすと、引あわすが稚心の毛廻りのとをさ
度のとをも。毛を吹く雪あれど、

十日 山早春とすと、長用のえをひく山の細葉ニテ花
さくをもあひけり、タクヒ退すとあり。

十一日 今吉物始てびひ、本賤家と小業仕初日あれば雪の上に
鉢鉢とて出でうち返すとひそひと稻田とおと、芒尾
花ひとて雪の平野小佃すと、あるこしうちどら敵を詠
うめい小苗うめいとて敵共帳を藏むと業、高きよ

田河津の爲信をも教ありしが、うまをじつ

十二日 はるかに雪をみて、寒し年もひまつて、若男等
あそび肩を腰とけん筆とて稻藁をも編ひ蓑衣の如きあ
そびて蓑笠をかづすと、やうと鳴子、いろと扇と背平とし掛て
あそぶ龍とて、弓の組籠と提て、木螺吹きと、馬鈴方錐
とて、銅鳴りをすりて、そうちす、今家小群れへ、米糀餅
をくせめ、うちつきくとすければ、やうと扇と上げて追へる
去ぬ、そめのとせを水うちかげてゆつて、そめの村とみる男
を、身小病をもぬめかどり、かひとて不追へば、やうと鶴のま
はるかに見ゆるあがめをも、そめのとせをあくは鹿踊を指
鶴とて、南部路の井島をもすとあり、かす、蓑笠と鹿の角

其形を作りて舟を伏せて棒つき手籠にて餌りひあり。卅
銭前後、祝水をうちあせり。また卅枚鳥等の主にま
してその家小入り、廐の前まで木賣にて馬の糞、吠子ある
舟で運び、仕合せしむへと口のうち手に付く。卅枚横底
と袂をうちたまし。今をさす喝事もどくとも知るも
うきをき。手ぬきをす。片馬あれ。堆島、雄島と向ふ堆島
と云ふ。日暮とんとて集め合ひ、餅を奪ひ合ひ。雄島
をかみ、雄島をかみ。争合せれども鬱鷄の者も争ひて争合揃合て
か立あひのを今もけ。八十翁の語もあり。事とあり。す。
とみ。此岸鷄等が姿を見れば、田小屋のあらそひの人物は似たり。
とみ。鳴子附子、鳥追ひ猿追ひ鹿追ひ鳴竿のようすり。仲良い
年始より田祭もあつても、その氣氛よりさへと

えひだ、説詣いわづけへもくらひうらむ考案かうあんは、保食神ハ馬祖まそ也。
建南方命たけのみことと其物そのものとして、此二神このじんを既うなづの神と祭る批ひ由来ゆらいで、諏訪すわを嘆なげむと云々久比良くひら、蠍アリ、蟻アリ、馬牛ばうを皮肉ひにくて生アリ虫ムカシを喰アリ、
腹アリやおせアリ、地出アリ也アリ。まじめ歎アリ死事死事ありアリけど、須波すば
の建御名方たけみこ御神ごしんまで、批ひ蠍アリを起アリて給アリと冥心めいしんとて、
あり事アリ物アリも、山下アリより雨アリれ、批ひ佐島さしまら、門アリ妙子アリ逃アリ出アリで
あり十日アリ日物アリ始アリ小作アリす、田アリの面アリど小群アリれど、主アリ今アリ母アリ
山田アリ曾富アリ豆アリと云々延鬼えんき古アリ少アリて人アリひこを即アリ曾富アリ騰アリ
やアリ事アリ事アリ古アリ事アリ記傳アリ十二卷アリ古アリ兼アリ精アリ、春雨アリ小アリれ
曾富アリ騰アリ山田アリ曾富アリ曾富アリ、
十三日アリあくアリ西アリ冬アリ、泡アリ天アリ月アリもあく
そほの先アリ浦アリの天アリ用アリ、片アリ鶴アリすアリまみれてあく。

古日よりして或いひをり。是以の祭馬に桐木貝吹き。
笛吹き、鈴子、馬の鳴輪、以及て、鳴子、うちゆりて、誼哈シ、笛子、
手鼓の音、樽の音、あらまゝ、家の音、作酒する。また、化す病
小晦で、晴れ、持躍して、おめでさんと稻倉観音、村鎮守、少々
事あり、三番手をやねびる男が、も文と多く、村の若者の聲
をあさへし。あれ。

古日より栗飯を、黄金餅とて喰くふ。家の嘉例とて、祖
母の子、せちから、田佃をもよもよ。安
心の西をかくらへ、田うねる。門田の雪、ひらひら
そやくま豆うねる。豆莢をぬすむと山畑の雪の中、萬
千種の花、牡丹のそれより、纏を舞ふ。之の纏は、匏葉、山茶、
梅の緑色、銀をもつて、其籠の東を机もむ。付書にて、
代頭よりまほのあみを、くらむ。もくらむの縛もあり。そ
ぞひく神道で、馬祭の尊焉あら國の神のみ。如る事無く、
えもうじとあり。御とあわむまく、又母子げうづつ。毛子に、
耕く。業を怠らざり。かくても、男あらず。其の近隣も、あけづき
經より佛の法式とおねらる。佛のことを、不二ものとす。事は、曾
とひく卅二人の男、出會ひ。そぞりのあらひゆも、ゆきに、
ゆきに、兩人の田力も。どのゆきひして、あらうまく、こまく、稻田と、佃地を
田の被登る。あらむまく、こまく、ゆきへの勝負め。そぞり、あらひ詠
う。此朝子は、かくの田力、あらあらうまく、こまく、稻田と、佃地を
鉢鉢うち耕し。うまく、うれば、苗あらうまく、秋の多ひ。ハ事立多くハ
重穂玉立。ひて、家えみ、常く、佛の下へまくる。田を作れ
経典で、おへ香を大きい花をうけて、おやじぬづとす。けちの秋だ

男の千町田の面々夕顔をくじと生ひ地蔓文の延び草をやどる花の
 とうと咲てやがてぐくかわの壺壺の子^{フクハコ}、此男うら見てうすま
 佛のぬしあげきは是喰ひて余せんとぞうち破しへど、瓶の中、
 精來のまくあへんもあれども、神も佛も志がまむる人室、
 給ふすもうかとゆくひとくうびひあじそめとよ、食せ
 べて正則の事始かかくをせりけども、地事書かと見えず、まばれ
 まゝ沓と靴と田畠の中小走りけとおじ夕坂へひもとひも白粉
 てわきの男女掌に舟て、是て誰れとも顔小ぬりてとくせんを、
 是て花とかけとよどむれ、稻より花吹きあふむ世あがけ
 まど心をすくね目づひをえりとて、よき御事せじふされ故
 事あらわさくばの當を乞ふ見せよかと世とのまよさか、か
 ともぞうみはれい白粉のまよあひ、近き世よ、すく白土で拂ひ奉

三四日也、前日より重乳白物もくと肆ようやくとあらうて買ひて解
 る事あるも、是と塗るも、今度は、かの男のとくとく手本物語
 戻る後の方も、稚童みすとあも、五月代からひまじの、自形
 つけて逃げて、人を立たせぬなど、まきぬく、白粉あつくと化粧
 紅のふきのあら顔より、ぬう花つけられて、よなに、油雪のやう
 見る者、今度は、小雪の落り、落ひまちせられ、前澤驛と津
 銅金は、をとよと油と解てゆうあく、田女老若の、あら無墨
 の花吹きも、むあれげば、うか悲て、土藏をとぶ逃げ隠れ音をせて、後
 まく、あまに夜着引かざりて、病人のあひをとし、また大うる羅敷と
 斜小切で、それ小太字、正字、十字一字をとども、かりて油墨で塗て
 袖ひき渡し掛あらひうかの男女顔を、すき中を、日射すし刃を一筆

百二十日大文字面をとひて祭事に此花漬、若男等、まつはい面を出る
の如くあり。されど事もなき事ともせう。秋小咲八重稻花
うさかねあいとまつこを見れ。

十一月三十日夜市多小童ども起きて大箕をすみ上へあせり。櫻の
えさみをして世供せ箕をそむ。早稻鳥、わくくもく鳥と云
いもせせすも頭割て鹽せそ遠嶋え追々連れ遣れ。遠くま
近くま蝦夷が嶋え追てや。また前涼驛えとぞ。ちやくもあ
く猪鹿勘六殿小追れも尻尾をもつて、ひうべがよて進
みじ。夜明もそぞぞれ燼の端の金花猫を花井庭屋黒木うり
誰が毛毛を笑。持もらひ年年のもとをもうのうそとて、雪吹
烈さもとぞ。貝吹きのまじ笛吹きのまじうちもれありくらひをうそ
寒し。朝の霜も有名せん。天冷て新の垂水の街をひむせ。

十七日お出でとお寺のものもありて、月を廻すてりて外をそこ
空度の隈回を見え能行を。四あそぶそれと年も月餘の光
をすすむとぞ。重ねの居間ひども唐てゆり田うゑ踊るん
れどけりてあしあぬ後えとぞ。寢し。

十八日あしあ日出でやがて雪のふるあひ、田植躍とすまつて、
笛吹きづみうち鳴らし、そき、錢太鼓と櫻曲小絲て十文字子
引度し。その糸小錢を身負ひ是と争り、紅布鉢纏し身の不奴田植
といひ、菅笠着て身をあせ。早丁田植とぞ。やん十郎と云
竿馬子と扶ひて出開口せり。それが詠歌。扶毛の藤九郎
大旦那の田うゑあと御意あむれ事無。前田千莉、後田平四、
金と二十枚あひ。田馬うゑをやまきく、太黒小黒太夫黒相手
栗毛小鴨槽毛脚入を覗ひて嬉れくゆ。うと王耕代五日處せりうと

「誰もく太郎が嫁子次郎、勘橋の下の者で、かどりの下の妻、七月
既身で腹産き、惡阻と殖てされず、ではある。父をもおらず、少
ひ玉で踊るをこの田でみゆき、田うねれを踊る子(こ)へと名め
腰のめえ御殿主を此ぞ田神と遙くうねり踊るをかゆる。
袴を割て目隠して白粉塗て假面とこそ是とぞす。田を
出でて見難れて躍る此事をされ、酒終せどもくそく、錢未弱折敷
びゆきの祝言とぞ、田植踊等不れり。

十九日までは、石子雪をあてて、氷河え。去年少しあつて、裸火のことを、革の小筆の本おこるゝある。

二日を、船井郡、平泉郷の常行堂、麻多羅神の祭見去り。良道をどよめかれて、徳圓の上座で坐てはや外もあつた。ありとて語り、遠くに田舎の雪の中へ下りて、そぞろ。

鶴形かづらがうごくをあらわして、真鶴黒漆まなづくろしっ、餌えを立首たてくびとし
生るがゆゑ、こままで秋稀あきはづりてあるや此鶴形このつるがたとよも、世蔵の
始はじめのうづの世よを及川某おいかわのいにしきと云、武士ぶし造つくりてあるがゆゑ、其後のち漸だんだんありて、
其及川の家いにしきのいえで刻くみ形がたするをうながすれども、鶴の彫くむひ下さ降ふり
と云いふ。良よきの作つくり人の心こころと見て造つくりてあるをもんとめて、おもてへぬ
色いろを鶴つるの目めとぞとくとも、そりげに及川の家の鶴形つるがた
今いまも能のく鶴つる解わかれゆすとて、鶴形つるがたもとく大きめおお小こさうとて、
馬うまの骨ほねとくも、真鶴白蘿黑漆まなづくろしっと云いふ。彩色いろどり、附着つきつけるを云いふ。
小ことも、方言方言里さと、其その小こいみ多多くる上うは、大豆漆だいしちと云いふ塗ぬりを烈いたずらしき、雨風
落葉らくよう吹ふふれて、之それ腐くれゆて残のこり、田たの畔は、小こ柴しば等などで射罠的罠に
之それ内うちへて鉛炮鉛弾してうつて秋稀あきはづりて多く今いまを譲まわす
形がた鶴つる形がたとも作り出だす鳥とりのほくをも、又またあさむむむむ。

降もあらましにゆきりく薔薇と一事。手の枝と花とを
見つめ、姐立ちて雪をうなづく。前澤駒とて、
地所の家へおまかせ。枝小替玉とて、おもむく餅とてぬき附を
津まみで、勝軍木菊削花と、變英とて、某木の枝とて、ね
えりゆとりす。ゆきの枝をわい曲て青小竹の箭の三支
はうひるて矧てその弓上彌とて白麻を乱一附て艮門の方を
見る。あま所で前花の木の中は枝不詰ひ添へて倒して二十奇
の巻斧をもよほん強けりける延喜式の御佛名とて菊の削花
を考す。正月門戸は前を押しこそく古きものとてをめぐ
ぐる。鈴木常雄の事より書をもよ。考へて御津の郷あつ
て出會ひとひど常道とて人とて、横路も雪多ふらて、
あれど無事始とてあらむ。常雄かくとて程よけれ候

多分あつて、遠く御木一寺、とある寺、引つゞてもまだ未だ
立派にてあるぬむらをうれし寺、道もむづの
方小名前の大櫻とてあり枝四方八角とて雪でおひす、本社
大門を十二門とて周囲とてそく齋りて不動明王堂、
家二三戸ありて村名も大櫻とて、秀衡東稻山小平本
の櫻で植うれ一事、ありてのうて子ひづむとて、琳大院を
平成多木さんとて、秀和本多とて、のうて雪も大櫻
角也サ方中のうれ見じよ出て堂まで入る、かくも世事せせ
有の多小白島明神の塔の跡も雪てあり埋れ、白島二郎行任名を葉
全竹、徳澤長根が雪の片唄小小竹の聲、志士輝井太郎を
陣取し地にすと道の傍小雪すし埋れ一碑を山田治左衛門にて新鑿奉
はせり因みゆきとて三月廿七日をもとて、瀬原

黒木家今金命丸と子樂を賣る家あり此里の良の方小松館
主はあすを阿部兄弟極哀れ瀬原相もひまつゝ
風流にぬれり。又は衣川を橋り廻り地ももひまつゝ
居て今も東は流水をせ坤切とよ。兵多くうち死れる
滌水不歸して甚き武藏坊むら上を流れどく北上川
夜川も一時で流されど、あらわからずひさ方たるゆか
寄りの及て、弁慶の上を流るきりともあらず。是とひしと
かく世表の源小清淨瀧をそぞく大河を瀧あり今を障る
主詔うどるも、慈覺圓仁大師、夜てあひのほほの手がけて
朝し給ひ、もとさればそれち、瀧と夜の川の流の東や衣川
とよもん、順徳帝、風浪を夜半小衣のせまくらをねれ
及やるれども、み給ひる是圓の古跡を鶴木と地より存す。今

来藻里^{アラシマツリ}、卯の方小面行ひて東稻山^{ヒシヤマ}林鹿^{リムカ}櫻あらず殖て
世稱はる影上川北御の水下り散れ、雪み流すごとく
いそよそとくろけれ、秀衡北上川を穂川^{スカイ}名附しれ。左方冲川
すもまくおもしき今も東稻山^{ヒシヤマ}櫻一樹^{イチブ}中尊寺の志
櫻川とみて酒駄亭^{サケド亭}をとくの、ひく負任^{ハシト}、兼^{ハシタ}則任^{ハシタ}命^{ハシタ}
死^{ハシタ}せればその毒^{ハシタ}、すも十八^{ハシタ}夫の勇^{ハシタ}うきとくくみみ
嬰兒^{ハシタ}をとみて、今^{ハシタ}毛^{ハシタ}於^{ハシタ}木^{ハシタ}衣川^{ヒシヤマ}水を流すかも
名をばあざすとく、衣川了^{ハシタ}處入りしとゆん語り傳へ前太平記
城内の二^{ハシタ}堀^{ハシタ}小身^{ハシタ}で役^{ハシタ}と見え^{ハシタ}す。阿倍則任^{ハシタ}が居^{ハシタ}城衣川
在りて、一^{ハシタ}堀^{ハシタ}も、二^{ハシタ}堀^{ハシタ}も、三^{ハシタ}堀^{ハシタ}も爲^{ハシタ}め地^{ハシタ}。異^{ハシタ}中
少^{ハシタ}少^{ハシタ}也^{ハシタ}秀^{ハシタ}す山^{ハシタ}あり^{ハシタ}す。磐井郡式御神^{ヒシヤマ}、二社^{ハシタ}も^{ハシタ}は
佛草^{ヒシナ}神鎮座^{ハシタ}す。鈴木常雄^{ヒシヤマ}、^{ハシタ}りくを^{ハシタ}す^{ハシタ}とお^{ハシタ}べ^{ハシタ}る川

破損あり

かねて參りし。神もまた村上良道、毛とすら済き雪消
の衣川さへあえずすれど、ひやく人のよきをも。衣川ノ世
多シテ、手と身の處れど袖ぬれ。今之物もとづれと
字にあせければ、なみじにてとあり。一本、鈴木三郎畫家。
城松、と權正兼房等の石をどうぞ、舞慶冬龍まと。ま
い朝もよそぞく。毛の少び古びて埋のむ。あすまと不高き
名やきつて候。うそと中尊寺おもてむとく地中尊寺
をはる鎮守府將軍陸奥守奥羽兩州押領使從四位上少將藤原
朝臣秀衡入道世宗在し。白河開より外を濱を千本寺堵
キを中央より引とて中尊寺をさとひ真名弘令壽
院と。鼻祖を圓仁大師。嘉祥三年小開鑿。中尊寺と。らう。
白山神と。日吉神と。しまつて卅二柱大神山をまつし。

1 鎮座。四月初午日。白山神の祭。七歳男童。馬小乘て輦。白
兔の作。物。世白兎。従者。毛とすら済き。沖ノ。徐。まひと。
事。裏。爾。白山神。玉。八十。溝。姫。の神。もと。は。漢。韓。神。
毛。と。毛。と。か。其。日。田樂。舞。毛。と。と。と。賑。裕。
の。諸。の。經。藏。戸。印。セ。入。道。三。獅。子。小。卒。文。殊。師。利。菩。薩。
子。と。佛。陀。波。利。優。闍。王。と。の。佛。毛。比。首。羯。摩。作。
毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。毛。と。
釋迦。佛。一世。の。經。典。納。經。の。始。七十四代。帝。鳥。羽。院。み。ら。み。
つ。を。給。す。天。仁。元。年。戊。子。と。藤。魚。清。衡。寄。附。甚。世。不。名。あ。手。
多。僧。を。集。て。古。寺。に。在。經。曲。紺。紙。金。泥。て。か。せ。ま。し。
一行。金。泥。一。行。銀。泥。の。文。字。て。書。多。う。此。經。典。卷。三。玄。木。瓜。

の紙ありも家事事小金治の事
色ニシテ、本多子、此多子經典の中、金治世、一切經と
文字多ト譯のりは、もりとす。墨退粉紙少て黃色梵本
の經あり、モ宗板か、秀衡寄附、此經書の文字、墨鉢
アリバの事と唐櫃の内、大蛇歎水大玉を、蘿絲加蓋表が
やうめしを乃ぞ、金色堂、倍光堂、也、能もたゞ、か
ニ至天仁二年己丑春、清衡、建立の堂、モウ、菩薩の卷柱、
の表長押の螺鉢など、あるゆゑ、御、モウ、中、蘭世音菩薩
勢至菩薩地藏菩薩三尊の、ひとも、六角、モウ、中、左の下、菩薩
清衡の指あり、大治元年丙午七月十七日題記、左菩薩の下、基衡
指、右、保元二年丁巳三月十九日、右、立、ヨリ、もの下、
秀衡入道棺あり、文治三年丁未の十二月廿日、御、入道の棺。

和泉三郎忠衡、頭桶を後手内あり、ノミ、三代の、今、船主、年の
脂、塗て、巴、耳、耶、シ、シ、モ、棺、小、攻、沙羅布、と、布、モ、
上、包、封、無、し、年、正、絃、布、モ、ち、れ、て、も、も、解、の、此、棺
け、つ、る、藥、氣、も、も、も、て、つ、あ、ら、眼、小、今、も、
誰、れ、も、り、も、あ、れ、も、も、の、う、あ、て、く、き、か、も、清衡、基衡、秀
衡、三、代、の、横、刀、あ、う、も、の、飾、を、も、う、あ、じ、建、武、二、年、ひ、ま、の、生
卒、大、死、り、て、堂、舍、僧、房、院、残、り、四、十七、年、の、洪、鐘、も、も、も、回、禪
時、の、間、小、所、と、か、し、も、も、う、け、れ、と、此、金色堂、の、ミ、燃、が、も、半、經
堂、モ、屋、根、モ、燒、く、れ、と、内、ふ、事、あ、う、が、も、と、不、足、モ、此、光、堂
經、藏、の、ミ、も、して、モ、外、モ、御、佛、の、モ、モ、う、も、并、慶、九、寸、分
も、も、う、も、山、賤、モ、も、山、鉢、モ、も、一、尺、二、三、寸、の、
モ、も、う、も、山、賤、モ、も、山、鉢、モ、も、一、尺、二、三、寸、の、

而も御むすり京都をあす小寺の開帳のとき其寶物の内
少異破石刀とよきりが多破石刀ひよし似うこもれ
なづく、辨慶時代のとせをあじへとくあるきとひてもく、
まことに康永二年と刻り、洪鐘をうちあり、堂舎もあめりやとゆく
四阿面下のけるとく作成、辨財天女堂下金光明最勝王毘盧茶
羅十卷の金泥とて、影をみるめとあはれと
ゆき、堂舎僧の在り古跡と見ゆて、物見と松のもむすぶ
松をあへ衣阿を年とせりとまれて加美川の流す處と、武藏坊が
流れあり中の頃とすも今と田畠となりぬ和泉城岸松龜井
松蓮基野など残雪小埋れす、山の堂下武藏坊の七道鬼頭安
葬の元より不傳て、近き世をもと見て見く第之多し九郎判官
の館跡高館とすあす武藏坊館跡をの外れ無事に住めば、高層、

久、山賊の住家となりぬ義經堂小堂等ともおどりとて、いとおれば
あらびひじとも日とてあまぬりとて、あらひの神事ふとく通
かほの雪の中、八花形とよきうとて、國衡、隆衡、館跡え
外堀を走る平町、田とて身世あるちとて、小堂あり、此堂の内室
鐵塔とくとく大うと鉄塔のかづく碎きゆくそく内と女黒髪とく
納のう、ひと秀衡の室のゆけうゑぬる髪とく納られ
まと金玉のう、今はあうて玉手ひくとて、平葉葉幕とくのう
りえと、金玉かねりぬとくとて、白毛のうとくれるとて、慈恩圓仁大
師陸奥國修行のとき白毛のうとくれるとて、み地色で臨
越て山の今給す、白鹿ふうじとれて、眼の老翁うくとくを
會おうひと圓仁とせ珍す我を山と守護の翁と、鹿とくとく

ひげて見えも圓仁、こを琳山で御ひる、賤山殿等ヤマツツラシをも、佛法流
布ブある神の造給サツケあると、みをみて、藥師如來スワシルを安置スエヒツリす、毘盧王山、
毛越寺金剛王院と云天台宗アメダクンジの堂宇を安置スエヒツリす、衆徒をと
費カネをして幣カネをさし、山あら元龜三年の秋大不アキタガハあちあけを定め、
健タケルの毛幾也マモニイエ、そして嘉祥寺破壊スルカタされるとともに堀河院鳥羽院
の勅テクありて、あさひ興アサヒして藤原基衡フジワラノキヨハシの建つと、嘉祥寺カヨウジを
圓隆寺エンロンジとも、新ハタハタ建立ハタハタあり、その時の勅使テクシを左シナガ辯富任卿ヒラタキヨハシ
富任三輪平泉ヒラタトリニワツイハツを候ハサウり、その跡ハタハタを勅使屋敷テクシヤシキと今も鳥崎坊トリザイボウと
衆徒ソウトウをも、その東元正嘉ヒタチハタシハタシをも、相模守時シマモモトノヒメ最明寺セイミョウジと
落飾スルカタして、法名ハサウで覺了房道岸ハサウドウジと號ハサウして、あくまで餘ハサウと云ふと
音オノ枝ハサウとあられと、庵の跡ハタハタを、舞鶴マツル池ハタハタも、雪小趣シロコツの學
隠れ梵字ハタハタ池ハタハタ、鈴澤スズザケ池ハタハタ、御の御所ミササギと清衡キヨハシ、基衡キヨハシの館の跡ハタハタを其

むろ江刺郡豊田館ヒタチハタシハツをうづれて、豊田御所ヒタチハツもえんエンとも秀衡
泰衡館タケハシカンを、伽羅樂カララツ御所カララツと人ヒトがの御所ヒトと、泉術所スイツも
以シテる泉酒スイツシとも、豊酒ヒタチシの涌ハタハタる事ハタハタあり、酒シ、榮ヒラタのハタハタ居館スルを
泉御所スイツも名附ハタハタれるもの、泉酒スイツシの涌出ハタハタ池の跡ハタハタを今も泉崎スイツザキと、
了ハタハタ泉三郎忠衡スイツサンラウタケハシを、其ヒトの小住ハタハタして、泉スイツを、すこしあ
あくまでし、正月ハタチの、すこしあうの唱ハタハタ歌ハタハタ、泉酒スイツシ涌ハタハタや、
古酒ハタハタの香ハタハタを、妻持ハタハタの殿ハタハタの、すこし今も泉酒スイツシ涌ハタハタかの酒シ
香ハタハタをもれと、歌ハタハタもあり、歌ハタハタを、歌ハタハタを、御ミササギと、尼寺ニシ跡ハタハタと花立山ハタハタと
岩ハタハタと、基衡キヨハシの妻キヨハシの、其ヒト妻ハタハタの、四月ハタチ二十日ハタハタあそぼう地室ハタハタ、どうく花を
好ハタハタも、其ヒトいづれ花ハタハタで作ハタハタて地山ハタハタす、室の裏ハタハタかどり花立山ハタハタ

埋てば、基衡の室を阿倍宗仕女^{アベミツシナヒメ}と和敷^{ワフシ}を志^シ事^{シテ}ひり
本草花^{ホンソハ}とあうを給^{タス}。今も四月廿日トメノヒ僧^{サムライ}あま^{アマ}と出で候^{マサニ}
葬^{ハフリ}の事^{ハシメ}で、目^メとあり當^{カタ}を食^エ。數珠^{スヌヅル}を以^テ、幡^{ハラフ}を立^{タス}、寶蓋^{トハケイ}寶螺^{ボウロ}
梵唱^{ボンザウ}をうる。是^ハ四月の哭祭^{ナキツツ}と云^{ハシメ}。ともに身^{カラス}をぬか^ムて、もとより哭^{ナキ}
金^{カネ}の日^ヒ祝^{シテ}をす。僧^{サムライ}筆^{シラフ}とて、鍊^ルをうる。金額^{カネガタ}を手^{ハサシメ}し、あらゆる
きよじとくあらゆる^{ナキ}哭^{ナキ}をす。了^リし、忠信次^{チヂミツチ}信^ジり館跡^{カニヤク}を高館^{タカニヤク}の
易^シ地^ジの上^{アベ}に、義經^{イキジ}の街^シ館^{カニヤク}を高館^{タカニヤク}と^ヘと^ヘ高^{タカシマ}と^ヘ在^リ。
その乱世小九郎^{コトノクニヤ}判官^{バンゴン}れま^シと^ヘ怨^ミむ一章^{ヒトトキ}を口^{ヒキ}へて、書子^{シヨウジ}も小
さく^シゆき^シ、その太刀^{タケ}を腰^{ヒダ}に切り繪^{カタハラフ}。文治五年閏^{ムダニ}月^ツ廿九日^{トメノヒ}
甲午世三法^{セイサツ}名^{メイ}通^{スル}山源公大居士^{サンゲンコウタク}と^ヘ別^{ヒキ}て、靈牌^{リョウハイ}を表川邑^{ヒタチノシ}の雲際寺^{クンジ}
生^リ害^{スル}。下^シ作^{ラシ}、兼房^{カンボウ}下^シ中^シ与^ス。多方^{オハラ}謀^スを討死^{シテスル}と^ヘ云^{ハシメ}。

給ひと前様もむれの公達とすまし、寺生宮を給ひ、上
れり義經今も心からと仰るが、併の内、岩小町腰のまゝ、
金念刀をもて、腰十文字をまとうと給ひ、兼房御詫されど、
さうぬとすみ、器て、首とうちのまほりて、兼房も腰十文字、
あふき五臓を觸て、起坐して、義經の首とひが腰の内をかくし、
契の衣を以て、表を拂ひ、息絶ひ、清悦、常陸近習二人を、寺所
火を付て、一時のうら煙とぞ、仰りてある。文治四年閏四月廿八日より
同晦日まで、三日三夜の戰ひを、高館の所落城なり。其時、衣川の
流血の色小束て、三日四日の色とぞ、さじて、乃へて、上編義經蝦
夷軍談、高館のとゞ小義經も、崔頭兼房が別れよし、源
もせひ給ひとも、考へて、氣色の見えられず、杉田太郎行信を、
義經顔面能ひて、姓名を犯す、義經の自身を聳て大特急

常陸坊海序もあらず細の事より、城小強も一軍一趾も追々
 高館小押寄也勝刀負也決死也文治五年閏四月廿九日泰
 衡^{ハシモト}舍弟本吉冠者高衡^{タケル}大將^{ヒサシ}長崎太郎佐光同次郎俊光照
 井太郎高春等三方維時^{ミツトキ}三木小介^{シマキ}長洲以高館^{タカミ}寄^{シテ}城中
 小室^{コノミヤ}覺悟^{スル}早^ハ行信^{スル}自室^{アリ}ければ幕房^{マグロウ}即時^ハ介錯^{シテ}首
 錦^{タチ}の直來^{ハタハタ}迄^{ハタハタ}み座上^{シテ}其身^ハ腹十丈^{ハシナシ}身多^{ハシナシ}切迫^{ハシナシ}
 海序^{ハシナシ}又是と介錯^{シテ}甚^{ハシナシ}やす^{ハシナシ}火を生^{ハシナシ}ゆり^{ハシナシ}煙^{ハシナシ}ざわて
 常陸坊^{タケル}跡方^{ハシナシ}もひく落^{ハシナシ}けれ同五卷泰衡攻泉三郎忠衡^{タケル}
 勅命^{ハシナシ}とませかど^{ハシナシ}敵周^{ハシナシ}小連^{ハシナシ}違勅^{ハシナシ}の罪^{ハシナシ}下^{ハシナシ}依^{ハシナシ}急^{ハシナシ}忠衡
 謂^{ハシナシ}もぎよ^{ハシナシ}過^{ハシナシ}文治五年六月七日鎌倉代^{ハシナシ}飛脚奥州^{ハシナシ}到着
 其^{ハシナシ}同^{ハシナシ}十三日泰衡^{ハシナシ}使者^{ハシナシ}一簇^{ハシナシ}新田冠者高衡^{タケル}義経^{ヨウジン}首^{ハシナシ}

黒漆^{ハシナシ}櫃^{ハシナシ}小^{ハシナシ}美酒^{ハシナシ}小^{ハシナシ}浸^{ハシナシ}千人二余^{ハシナシ}筋^{ハシナシ}腰越^{ハシナシ}の浦^{ハシナシ}を參^{ハシナシ}着^{ハシナシ}上^{ハシナシ}世^{ハシナシ}
 言^{ハシナシ}上^{ハシナシ}も是^{ハシナシ}よ依^{ハシナシ}首^{ハシナシ}實^{ハシナシ}檢^{ハシナシ}當^{ハシナシ}和田太郎義盛^{ハシナシ}梶原平三^{ハシナシ}等^{ハシナシ}各^{ハシナシ}
 鎧直垂^{ハシナシ}と^{ハシナシ}看^{ハシナシ}小甲胄^{ハシナシ}の郎徒^{ハシナシ}せ騎^{ハシナシ}お具^{ハシナシ}腰^{ハシナシ}故^{ハシナシ}來^{ハシナシ}首^{ハシナシ}實^{ハシナシ}檢^{ハシナシ}遠^{ハシナシ}
 はる^{ハシナシ}津^{ハシナシ}鐵^{ハシナシ}首^{ハシナシ}分明^{ハシナシ}是^{ハシナシ}不^{ハシナシ}佈^{ハシナシ}と^{ハシナシ}勝^{ハシナシ}我^{ハシナシ}御^{ハシナシ}使^{ハシナシ}を下^{ハシナシ}泰衡^{ハシナシ}義經^{ハシナシ}首^{ハシナシ}
 計^{ハシナシ}進^{ハシナシ}小^{ハシナシ}系^{ハシナシ}神妙^{ハシナシ}え就^{ハシナシ}泉三郎忠衡^{ハシナシ}よ^{ハシナシ}の^{ハシナシ}サ^{ハシナシ}二^{ハシナシ}の忠志^{ハシナシ}盡^{ハシナシ}
 然^{ハシナシ}ら^{ハシナシ}泰衡^{ハシナシ}もと^{ハシナシ}に^{ハシナシ}違勅^{ハシナシ}の名^{ハシナシ}と^{ハシナシ}傳^{ハシナシ}れ^{ハシナシ}是^{ハシナシ}賴朝^{ハシナシ}計^{ハシナシ}
 小^{ハシナシ}非^{ハシナシ}高^{ハシナシ}軍^{ハシナシ}の^{ハシナシ}執^{ハシナシ}斯^{ハシナシ}如^{ハシナシ}勿^{ハシナシ}此^{ハシナシ}旨^{ハシナシ}够^{ハシナシ}と^{ハシナシ}泰衡^{ハシナシ}より申^{ハシナシ}と^{ハシナシ}仰^{ハシナシ}天^{ハシナシ}歟^{ハシナシ}あり^{ハシナシ}
 され御暇^{ハシナシ}之^{ハシナシ}給^{ハシナシ}つけ^{ハシナシ}新田冠者高衡^{タケル}夜^{ハシナシ}と^{ハシナシ}日^{ハシナシ}繰^{ハシナシ}奥州^{ハシナシ}馳^{ハシナシ}
 めり^{ハシナシ}の^{ハシナシ}趣^{ハシナシ}を^{ハシナシ}演^{ハシナシ}泰衡^{ハシナシ}國^{ハシナシ}衛^{ハシナシ}表^{ハシナシ}小^{ハシナシ}之^{ハシナシ}と^{ハシナシ}仰^{ハシナシ}天^{ハシナシ}歟^{ハシナシ}あり^{ハシナシ}
 息^{ハシナシ}ひ^{ハシナシ}忠^{ハシナシ}衡^{ハシナシ}の^{ハシナシ}方^{ハシナシ}人^{ハシナシ}そつ^{ハシナシ}江^{ハシナシ}次^{ハシナシ}事^{ハシナシ}を^{ハシナシ}詰^{ハシナシ}け^{ハシナシ}北^{ハシナシ}上^{ハシナシ}津^{ハシナシ}遠^{ハシナシ}方^{ハシナシ}
 討^{ハシナシ}手^{ハシナシ}轍^{ハシナシ}差^{ハシナシ}向^{ハシナシ}し^{ハシナシ}自^{ハシナシ}害^{ハシナシ}体^{ハシナシ}立^{ハシナシ}か^{ハシナシ}高^{ハシナシ}籠^{ハシナシ}馬^{ハシナシ}脚^{ハシナシ}を^{ハシナシ}暮^{ハシナシ}し

父が遺言通り蝦夷小渡り金と全くせしと云送り同せ六日
 勅命は是派小及之も忠衡を詔を下す。自當八秀實^{アキラシ}計
 の大将當て其勢八十騎ゆく。泉の屋^ヤ下押寄せし典を任て攻め
 げる館の中少と忠衡^{ミツヒラ}即^ハ従ひて^{アシテ}せんと歎ひけ。此泉の屋を無
 量光院^{スル}程近い折^ハト夜^ハ全館^ヲ火^ハかづけられ終^ハ世量
 光院^ヲ火移らんとし。寺僧等も寢と詮と防^ハけ^タど^シ斯^ト
 行浦^ノ所^ニ故秀衡入道菩提所^ヲ為^ハ建立あつて靈地^ム
 宇治の平等院^ヲ摹^ハシ、秀衡自^ハ狩獵の財^ヲ画^ナ金銀と
 銀^ヲ多く、火^ハ既^ハ静^ハされ、向當八秀實[、]泉の屋^ヲ黙捨^ス。忠
 衡^ハ始^ハの即^ハ年^ニも自害^ト死^ス。死前^ハ忠^ニ燒^カ其形分^ハゆ
 き^リと^シゆ^リと忠衡密^ニ渡^ス蝦夷^ト。其夜泉三郎忠衡
 卽^ハ徒^ハ草^ト暫^ハ防矢^ヲ射^ス。後^ハ館^ヲ火^ハか^セ自害^ス。

主^トか^レ裏道^ヲ追^ハ出^ス。終^ハ蝦夷^ト。津輕深浦^ハ空
 を^ハ飛^ハり^シ。頃^ニ六月廿日^ハ御^ハ浦^ノ港^ヲ慕^ハ。秋田^ヲ即^ハ謀^ハ。
 交易^ハ渡^ス海船^一艘^ヲ。他^ノ港^下泊^ス。松前^{蝦夷}の安否^ヲ聞^ク。居^候じ^ハ
 忠衡^ハ來^ハて^シ。至^ハ從^十人^ヲ。作^リ西貢^ノ財^ヲ。見^せ羽^サ秋田^ノ者^ヲ
 平泉^ハ高賣^ハ爲^ハ。不^ト可^ハ端^争。度^度、^シ前^ハ宿^{アサシ}居^候。休^リ。
 船^少了^シ。走^ハ来^リ。追^ハス。忠衡^ハは^シひ^シて、義継^ハ侍^マ。其^ノ所^ニ姫君^の
 軍^ヲ高^シ。載^ハ少^シ。給^ハ少^シ。抱^キ因^ハく。水姿^ハ深^キ。浦^の遠^ニ忍^ハか^セ。
 忠衡^ハ抱^キ事^ト。增尾^{十郎}權頭兼房^ハ一子。增尾^{三郎}兼^ハ色^モ筆^モ。
 十六歳^ト。う^レび^シ御^ハ墓^ノ。姫君^の也^ト遂^ト見^出。而^ハま^る。高^館
 城^ヲも^び出^ス。泉三郎^ハ多^シ隠^れ候^リ。壯^シ威^カ有^リ。其^外
 其^外秋田^ヲ即^ハ徒^ハ並^ハ船頭水主^ヲ。取合三十餘人。上月九日^ハの朝^ニ。
 漢國^の港^を出^航。行^ハ心^叶。追風^ハ。不^泊。數日泊^ハ。

順風お待ち小松前船一艘地港小着岸しける如何かの船乎も思ひ
 秋田次節尚勝が即徒松前者を従て壇表の白紙梶も來り船をす
 忠衛至従御墓で伊勢三郎と大惊び急ぎ即徒小遇ひ様子を尋
 義経至従毛あく前小着岸し夫より今ミ端蝦夷白紙梶よ御
 布了印をと名をも海存尚勝歸于日本トスアリ既小義経上
 國小凱陣ノ餘ひければ龜井鈴木と始め伊勢三郎も假黒夫
 お来里志夫舍理の勝軍を祝へば常陸坊海存ニ義経尚
 某儀是より御暇を給ひし事學業熟しやまと修べ駒形巣
 附り彼異人教へゆき仙道不入再び神通を得べし君に守
 りありて諸大將をも懼ふゝとまじきを以テ義経も堪度ゆ
 来れ功小あらず志夫舍理の大敵と討取事難しもとと名
 残を惜し給フモ元より霜の氣色あけ出御暇をあまつて渡り

來モレ候も此鳴と従ふ沙沙會議へお行はれあらば日本漆屋の船を
 下知致はれ秋田次郎尚勝進玉其と君承従ひ草々君の武徳
 及年未就歎丹呂印と討一事日未づ本望何事、是妙然上
 下先本國立候り妻子すゝ遇ひ重々再び卅地を渡り高ヒ兵糧運
 清某沙汰一申べしと義経不懼不暇も常陸坊海存並葉松前
 安呂由と申小同船ト上國の海濱より本國を出帆しける係り後
 招前主上國まで通路自由少て蝦夷の人民太平を計ひける
 とき矣乎、船を上國太平山ありすと天國と云ふ港川入上國太平山ありすと天國と云ふ港川上國にて岐唐若
 誕集行う事、秋田治郎尚勝一とせま、本國小在りて、アヒ畫ども
 本國へ渡り其物候え秋田次郎尚勝之常陸坊海存ト告告過す、曾
 未松前を出帆、海上難かく日本之地へ着けり、常陸坊と別にす
 高い姿小身や此、本國秋田小多りしふ頃も日本建久二年籍倉

武威盛にて過す。文治五年八月、奥州主賴朝自軍兵を起し御館と攻め落す。原志山^{（眞澄）}、^{（按：金剛山より給木す。）}御館奉行を家人河田次が爲小討進給。奥州も鎌倉殿の有となり事で支キ源を流しける所と本國秋田を離れて渡海を自由にせられ、察察兵糧の為米穀を積て蝦夷小遣り又蝦夷の產物をもと本國積みかせ。貿易日頃八十倍を取る。奥州未曾冬蒙古と合戦度々及び。之程のく義経諸軍勢と催し前後八年の間未曽久の亂を静め蝦夷を一統し太平の政行れり。至秋田次郎尚勝も後方前より住み義経も後より未曽久より住み給ひ。本よりうふもり給ひ事も省かれず。されど家人身方より命とまじ。蝦夷制と治め未だうう父と平家より余せり。のまでもよしに在るべからず。その世を安置。而して平泉の金堂、講堂、法華堂、南大門、大阿彌陀堂、小阿彌陀堂。

慈覺大師堂無量光院、白山社日吉社、祇園社天神社、熊野十二所社、金峯山鏡山、隆藏寺、伊豆權現社、護摩堂などがある。と海寧其費^{（ひき）}も多き。壁^{（かべ）}を礎^{（いそ）}せねば、とその世をもがれず。また金雞山と山東至清衡の時、世をも。黃金^{（こがね）}の鷄^{（トリ）}、雄^{（メス）}二翼^{（ツツク）}を鑄^{（つくる）}。埋^{（うぐ）}められゆく。金雞山と云ふ。うふうあ。旭^{（あさひ）}より夕日櫂^{（カタマリ）}く木の下^{（シテ）}、漆^{（うるし）}千盃^{（せんぱう）}こゑ憶置^{（おもいおき）}。とて金雞山をもととせらる。ととせらる。此後を、ある人の童謡^{（わらわら）}。出外陸奥小^{（こ）}まろ遙^{（とほ）}ひきあはれとよこす。かくあれうきこゑと見る。是子祭^{（まつり）}の夜、すす日ひくよかりて宿を歩き世をうの事へ。雪事^{（ゆきこと）}、鎧^{（よろい）}をまくと給^{（たまふ）}。つぼうくあえ、元も支えむ。とくも。摩陀羅神御^{（まつらじんご）}、小の及^{（おと）}、寶冠阿弥陀佛^{（ぼうかんあみだぶつ）}也。此三毛の後程^{（レヨウ）}の方、御神^{（ごじん）}を被^{（かぶ）}る。摩多羅神^{（まつらじん）}、比叡山^{（ひきやま）}とも廣りす。天台^{（てんたい）}、金比羅^{（きんびら）}、羅^{（ら）}、權^{（ごん）}現の御事^{（ごじんこと）}をすこしも。素戔嗚尊^{（すさみのそら）}、すこしも。太秦^{（おおさき）}の牛祭^{（うさい）}。

主を王の鼻の假面オモテでかぶたるをと牛小來り手大椎シラタツから手アマ
麻吒羅神のゆゑアマラで法弘ハルム弘法大師の祭文あり此事都名所圖
會アソブの風カキややく神祭カミマツル海シマよりすゝみ篠掛表スズガハシマツリ着マツルす此優婆塞ウバセ
八雲カシマ出ハシマ也重地ヒヂ近アマ小也へタきひそひの空スカイ也と太鼓タケ百
うら鳴ヒラメクして謳ヒムクひ平代ヒラタケの神樂カミガレ也あよアヨひ寶螺吹ヒラコヒ神供
ももくモモクモカヘモりて隆藏寺ロウザンジの法印紅色レッドの鬱多羅僧ウツダラサニ小ももくの
念珠ナムラつまむ濱床ヒマベの上木座ウツヅシあさざれ衆徒スザレ寫ヒテ優婆塞ウバセみ
御誦經ゴトクジの夕ハヤシ常行三昧サンゴウサンミと之帝シテ梵唱ボンザウきともうあい
五戒ゴケイ阿弥陀經アミタブ誦ゴトクてちよチヨ神の脚前カツメイのす、聖柳の年王ノシと
主シテセキ作セキサれ來カミナリてそけりしめ合ハマツチ事モノ終ルれ已ハシマ優婆塞ウバセ
出ハシマ法螺ヒラコ吹ヒスケル太鼓タケうてばさうハサウの神供カミガレとおこオコ一圓居イチエン一けり衆徒スザレ
前マサニ居スルてあさざれ衆スザレ神圓カミエンあさざれアサザレ此直會ホリエと衆徒スザレ

ももくモモクハヤシづして上所下所アマツトトト一和尚イチワウジ二和尚ニワウジ三和尚サンワウジ其次ソシ、
下立アマリ新入アマハタ穀部屋コトハシマツリ入アマハタ給アマハタと申アマハタとと申アマハタ、
中老の役アマハタ御佛の脇方アマハタの衆徒スザレ入アマハタ先アマハタ上所下所アマツトトト一和尚イチワウジ二和尚ニワウジ三和尚サンワウジ
高アマハタそびアマハタくのげアマハタよもアマハタまアマハタこくべアマハタへいアマハタひアマハタ申アマハタすアマハタか
群アマハタてこくら群アマハタれ集アマハタる祭見アマハタ中アマハタ金鑰鑰アマハタで空アマハタとよが痛アマハタい痒アマハタい當アマハタ、
ひと小丁アマハタ急アマハタ似アマハタれアマハタ大アマハタ急アマハタもよのアマハタ事アマハタ不アマハタやアマハタ田樂アマハタの小法師アマハタ等アマハタ、
高足アマハタ腰アマハタ敷アマハタひアマハタとを姿アマハタつし體アマハタよ小舞アマハタ、田樂アマハタの小法師アマハタ等アマハタ、
胡桃木アマハタの膜皮アマハタをそ編アマハタ大笠アマハタの軒アマハタ、垂アマハタ幕アマハタ也アマハタ、
山吹色アマハタ袖アマハタ、衣アマハタ袴アマハタ着アマハタ桶アマハタ蓋アマハタ如アマハタく、とく簾アマハタ太鼓アマハタ附アマハタ、
地アマハタ三人アマハタ舞アマハタ、二アマハタも橋アマハタ小登アマハタ、起アマハタびく躍アマハタて今アマハタる、燒豆アマハタ腐アマハタ也アマハタ曲アマハタ、
せアマハタくり、鳥帽子アマハタ主アマハタを掌アマハタ持アマハタすアマハタ、是アマハタとあてアマハタてぞんアマハタと、拍アマハタの上手アマハタ、
を傳アマハタ、仕アマハタすアマハタ、師手アマハタ、能アマハタあどアマハタ、師手アマハタ脇アマハタ、盛裏記アマハタ、知康アマハタ、

破損あり

蓬莱とおひそ祝詞立かまよひてお事とく。すもすゑ
おこぼれ小法師あまの出来、鈴うちあつたをれ、唄うゑひき陽明
をくみ老女の面をつけて、身をすくめ、手の前ま蹴りて、（手づけ
まゆ等、神と御神（ヨコミ）もうちわがひだれがひくしをくへは、
是を老嫗舞（シテマツル）也。うばまし入れども、若小法師童歸（トドケル）も
あまがふして、若女温顔假面（マスク）小水干（カニシキ）あめの歎みひまく、
精好（セイハ）の袴着（スカート）、鈴うち扇（スカラップ）と色部布是（シテマツル）坂東舞（サカタノマツル）すうそに替
えを布衣鳥帽（スヂヤウマハ）、二尺（ツサク）まろの体形（ボディ）大正年間（タケモニエイジ）もひづけも是
て精好世舞（セイハセモツ）前半跋（ハタハタシ）、坂東舞等、法師の頭下附髪（シタツブフ）のひでどく、
まゆの毛を多めにされど、あまの化人（カヒン）を笑ひ、おとこ事（オトコモノ）で、樂屋（ヨクヤ）を
まわれてあまの人びとを我（ガ）ほきをもひそ笑ひよと、人を
おもねりて、まよひとて、仰がまむと、世中をくまく、小法師二名

身のぬれに京をみのぞむりあるを、雪山鶴をも、衣洞をこむ
身じて花憲へはれいふあく見ゆる、あまほしのうとやうれば
はの小き木銚子みて清き濁酒を給、丹えせんせんとおし
ゆれ、十二重のきみのほよどり立出を給、唐とくげをもよみに
ひき風情と、一首をかうをあそばれゆれ。
小身のめを見えし小げりもく袖うち、なりとまびとも、ぬ有吉
つきりうけあひうを捨皮の、身代こそともあらども、せそ物の内返事
さやえ、これ嘆病、うちみてとて、け少揆の如きとて已、雪半側面の鼻うちか
えて鬼聲、ひきゆく、口うちの東うちある（もよもよ前あき
う月とひめがのむ、ひせんかあくねぢのや、有吉、富任の徒者、
富任窮の本末うきて、そと玉椿八年代歸て、うゑの翁、有吉、翁、
心解焉、富任うゑ（有吉）おもう、冰とけよれ、と鳥帽子せらわす

せれん人を殺さずかがゆか憎もよて八旬を修。老母を
腹部山捨置きやせんの食と物も下そて、又心靈を失ひ、
「死因もか死ひか死んで死んで」、男娘捨山へまわらひ
ぬとしもうぬゆべやうあ、ひりと至手どめあひとやう
諏訪のる小川とす無ひて、おもへゆき、社櫛ふづきをすく。
宮金をゆきとむとむひまく西多く、宮奴と坐事く、今まく
とむすりて、宮奴神、すりて、鈴れべ神鈴う音、始より後
くぬと、更にひゆうぬひとすくと、御の音とすく鈴中
業平の小唐狩みうらのあみの鈴うと、それを計らひとせん
とうあひくとくとくぬまうなうなうともかく、俳優うゆくと、
うけりて、御燈ひとと、船う流れ、難といひうきぬ難れ小
法師を教説して謡曲うゆくと、順禮唱を安て、うとしう

鉢木常雄 見事な筆をもつて作る所は珍らしくないが、このす
ぎはうとうとありあま、夜もあくまで手書きで、
かうあふ舞を描きぬかれて、平葉民の家より傳り来る
音とその如いに、初見するやうに
せ、今日のうちにもあむ筆とあう、ちから取て表へ是れ
をめひとびとひそむ不坏としゆめられべ好くとほやきもひ
るがれ以あひあひて、寛永と白毛と學もひ、鍔のいとく
大なるとてづきめくとばゑふをして、御殿テラ集三の額とづき給
ひたるは最上河のあひせ波を酒ふ辭言で濁す酒と飲へてあひ
下戸の並居をぞと賢いと見てよまうとて、元のまほらぬ床の上
鳥足の文字からあひゆかねどこれ心靜敢春酒とすとて
あひゆかねどこれとて是を題と爲れ、山中もあはりを書

も争あらまし代りを、まじ常雄あすこすうち代りは
事の日下りるを、平代益、村上良道、喜風吹もあづけま
屋戸からそぞらすんちよきうす、かくくせき日それ多
廿二日、今おきじと、（ハ）是すりだ雪ゆきひて、冬をあす、めぐみ
あふらげじよく、鮭の散子、鮭鮭うろがす、奥どうなりて、あ遠き
山郷きこうかするを、此冰頭鱈少て、一ツすくせても、（ハ）すく終て
價ろ死寶とも、あわせ杯のしき道と酒をあどろと唱よ
うらよゑひの常陸頬あくあく夕見てとよつて、（ハ）うれし
思ひを出じむらとも、今としの緋衣小袖び、あわせと、その筆
ひがきを、もの絵の絵よ、（ハ）ひやく袖やぬくとも、と絵をとどり
の筆をまよひく、手をぬのとを、酒宴のまよひなす
廿三日、天氣よけい、あらんとて、さ別れて、我をうち止と、此あら馬うの

あはれのやうに泣く者をしてしとてあはつまでもあつて、かど、懸ふり。
 廿四日せと日雪あゆび出でて、あゆびの糞をくらひるが内を雪の
 あゆびのそと、十五日削化毛皮木の禪穂、削木の栗葉穂と禪
 穂をとて、鹿の雪を正月盡毛を説き去れば、どのうちもとて、
 売日空活を用ひ、さあせ蓬谷村小山にて山王の窟とて、
 す葉集めり、一て深雪をあみとて、うそりぬ、どうく其窓の内を、
 堂を作り、掛け、とく梯もくと登られ内間もうけ、真鏡山雪光寺
 と坂、將軍田村麻立百八軀の田比山門天と安置、鞍馬寺と
 蒙じうれやまとすものあへ、赤頭蓬谷とよすまの御富龍寺、
 坂居ら平塗り、あら圓相の御、まなむ田村將軍靈像をもと、
 うふをあきかへらう將軍扇をひまく、正月の夜を手火盆を授け、
 金あれ、坂舗柱と爐と、せしきの二日の大祭と追悔と、をあめ

とおまことく、じつとう集うと、百軀八軀の毗盧明天王と、
 えれて、今もさほう殘學をもてて、十軀もうとて、蛇歎鬼、
 鬼のよ、寶物あり、中尊寺、眞言の、もとさき、梯子下、來ぬ五尺
 ほり高く、金剛、金剛大佛と、岩面、小刻り、こそ、源義家、將軍弓、空彌
 とて、御給、某佛の頭と、とて、姫侍が瀧とすり、玉の妙石と、
 あり、瀧と、瀧谷、唐舟と、潛て、女事あと、捕つて、薑とて、ほらき
 め、岩の傳と、さきと、某室中納言某卿の、娘と、補しと、かうく、
 せよ、元井の楓と、大九ツありて、秋もと、ふわげむ、楓樹ありと、や日望
 解玉の雪を、きて、行剣拾ひ、す、山崩山といひ、五郎樺森ともいふ事、
 以為れの名なるべく、知れず、全か、五事の闇を、見べきと、
 多く、雪消り、あまびとて、千葉の家と、ゆ

廿日、毛越寺の衆徒、某二人日吉山を登り戒壇を立て、龍王
即ち世済師もて、故郷を書きしとて、あめ里と長谷と
のすま衣冠ひとれく見ゆ夜よしとて、わきみとみかみと不思
せ九日、毛越寺を出でて家への歸り、窓より空のあらざる
あらざるへ織ひを起してうけて、毛越山と川原と小川と正月三橋
二月朔日冬至松竹林は外の森とも栗の樹は鬼打玉て正月の山茶外
莊飾より、おと節を乞年とあれ、歲直へと祝ひてもなきひと
多くかられど此般石井郡をもとるをす。行事も膳津郡より
考の始の内生も西東の木と庭中一小さくままである。やうに東の
置て牀の上れを餅をもとみを田神星坐の守れるとあらざる下よ
うす音いとむ。白杵鉢鉢をもててもとみ餅をもとみを(十日ほど)す。其の太著を作り
の小豆粥を喰ひ世日、稻の種のうるこ湯もみ湯も形よ太著を作り

その船、船身著老、十日粥を呑ひて、太箸で十六字ノ綴没を
縛て、又屋の梁を投げて、その箸で屋根裡より立す例多
世の逸聞里、山目山の御事門柱も根こし等口ねてあら
そめ移る正木の蔓と云ひて、其筋も、
うそ本筋と平歳を重ねの枝りかくし
君之代を重ね本筋

二日厄年祝子のまゝ道をさりて雪もひまつてあり候中
下まうちらの火アマツの火とやまを祝男アマニとあさと酒のまうらる
あさめつむ櫛ハラタケの火アマツの火アマツの火アマツの火アマツの火アマツ
臘シキナをかくとて相シカシてまみ跡シカシの臘シキナととすまかすありぬ、三ミうちれば火棚
よとの媒スルよ火アマツの替シカシて鎮シカシる祝アマツとくとく金瓶ヒメボウと火アマツの火アマツ
三百ミサカを金カネうつすありぬ今朝アサヒ若水波カワモリをかうとく此大利ヨウキあみ
ちアシてまみれまひやとく年賀カニツとく歲シカシとく年連運カニツとく祝言アマツとく

破損あり

小豆粥食の酒飲く。御手をうちのばあま。四日、九日風吹風
六日、あたたかぬものきく。夕日、火の蟲、出ぬ。琵琶法師来りぬ。
是も慶長もつて、三線サンゼンうなりて、猫の皮す、紙張の機面化り
あまが多し。曾我、八嶋、尼公物語、湯殿山本事、あま。年代、やうこと
女戯メイコよのやうきど。浦瑠璃ウラリでせり、こひも。曾我、あまう
上く、ちあらわしゆる。浦瑠璃ウラリでせり、こひも。曾我、あまう
近りく、序も今ぬ。めいばくかうじと、物とれがむすみう。
旨を身びとひく。平家之家と出ぬり。高館の猫間が淵のす蹟
梵字ボンジ池の名す跡。中尊寺チズクニ。御使中納言、顯隆卿ヒカルノミコト。勅使清水と焉
守へ。檢察使中納言顯隆卿ヒカルノミコト。琳もめ一給ひと。
文治の年ハサキ。燒残ヤラスル。庫の内、牛革、犀角、象牙、笛水牛角
紺瑠璃ウラリ、筈、黃金、玉幡、黃金華鬘ハタケマツ。銅之蜀江輪シナガタ。雜

こうのれ龍之助の燈籠ラン。南送鉢ムダツバ。の物を多くげん
京府頼朝公アサヒル。葛西三郎清重クニヒロ。小栗十郎重成シモツヨシ。とふとし
此寶器等シテイ。も詰ハマ。東鑑ヒタチカミ。下ト筆蓋ヒタチカミ。とえあ。もとて。脚館カツカニ。の鑑
争ハサフ。世を去ハシマフ。れぬ。まと。奥州征伐記アオシマシヒガキ。二卷。小文治三年。秀衡ヒカル
病氣ヒヨウの様子ヨウジ。て、ひの給方ヒハシ。小顏色ヒヨウシキ。老母ヒヤウモト。宿ヒヤウモト。近ヒヤウモト。お足
あればハセバ。わあ累ハシマフ。中ハシマフ。もと。言上ヒヤウモト。と。紅葉ヒナヒバ。奥州ヒヤウモト。秀衡ヒカル
の使者ハサフ。由利八郎惟平ヒラタケル。鎌倉少輔ヒサシロ。舊羽千瓦ヒヤウマツバ。矢根駿馬
三十四金作ヒサシロ。大力三振ヒラタケル。砂金等ヒタチカミ。進上ヒヤウモト。と。これ。秀衡ヒカル。やまのうゑ
少良ヒヤウモト。お野ヒヤウモト。の舊ヒヤウモト事ヒヤウモト。と。おひく。衣川ヒヤウモト。土橋ヒヤウモト。と。おひく。
前尾ヒヤウモト。驛ヒヤウモト。出ヒヤウモト。霞ヒヤウモト。桃寺ヒヤウモト。の長老ヒヤウモト。おねこ。おひく。おおき。おおき。おひく。
あはてハサフ。上ヒヤウモト。の德圓ヒツヨウ。小さく。と。升ヒヤウモト。お氣ヒヤウモト。や。ど。

廿冬夜、燭神ヒヤウモト。あま。すう。ほと。日と。是。壁ヒヤウモト。祭ヒヤウモト。と。染ヒヤウモト。説ヒヤウモト。

アラギ小豆小豆を手て持て御はあり、人まゝ食ひや、荒神祭のりも
す。其の変神齋津嶋御^{ヨシシマノミコト}葺流の如く鎮疫齋^{ヨシヤ}などある。御
事ありけり。又九日十日十一日十二日十三日十四日十五日と日ある雪もし。煙火の
事もあらず。されば今後^{ハタキ}二月の末代股^{ハタケ}、三月蛙^{ハマツチ}の
目^{ハタチ}。冬^{ハタク}雪^{ハタク}もいへ涅槃^{ハタシ}なり。かく讀してあらぬことを語りぬ。
十四日夕方、雪解^{ハタク}と長雨あれば、雪^{ハタク}あらば^{ハタク}し馬^{ハタク}もじに延^{ハタク}もきて、童
あまと群れ集う。笛吹太鼓、銭太鼓^{ヒラタガネ}、調拍子^{ハタケタチ}、小^{ハタク}也^{ハタク}鹿舞^{ハタク}
あひ^{ハタク}。す。田植踊^{ハタク}の里^{ハタク}にて、藝び^{ハタク}る。箱蓋^{ハタケ}を頭^{ハタク}戴^{ハタク}く念佛舞^{ハタク}
の者^{ハタク}を^{ハタク}。鍾^{ハタク}舞^{ハタク}を事^{ハタク}せり。けい^{ハタク}し^{ハタク}せん^{ハタク}を詠りて^{ハタク}。世
鍾^{ハタク}舞^{ハタク}を事^{ハタク}。いの^{ハタク}いの^{ハタク}假面^{ハタマ}をかけ、袴^{ハタマ}縁^{ハタマ}を髪^{ハタマ}みす。軍扇^{ハタマ}を
振^{ハタマ}。太刀^{ハタマ}を^{ハタマ}つまむ。ぬき^{ハタマ}て扇^{ハタマ}。金剛佛^{ハタマ}を^{ハタマ}高館^{ハタマ}物化^{ハタマ}も^{ハタマ}す。
そと^{ハタマ}人^{ハタマ}高館落城^{ハタマ}の後^{ハタマ}あく^{ハタマ}靈廟^{ハタマ}中^{ハタマ}ある。四^{ハタマ}きの間^{ハタマ}

そのち云々 亡魂を掌りあらざるを物化の姿小刀を銚り金で
念佛をうながして盂蘭盆會とし舞ふも品てこうむ遠は國の戈谷
の念佛盆燈養だら、それと男童の春遊びがちぢれやうだ
十九日念佛の別れより遅くまことにと多、七八日と云ふ。此
きがのうじて日記もせざる。

京都の春をあて、嘗て山中と往来する多事。何とも、ものちの
ものしことを表す。數多様であるて、解説。うしのわの段落も、被る
事あり。日記れ。其都、其都とも兩人。おどりや。盲導法師。三経。
あひがまそく。音もあつね。主生もちよて。出で淨瑠璃。あらゆる事へん
それゆゑても、よく語れ。いはむしろ、もやもと、もよろづのゆゑ。年
告て、家室の、琵琶の唐碑でも諳じて、強りやまをあさりや。

もうちからむじめ大ひきある家、美人をう娘、有り少しあの
うき女でま小琵琶法師、世家を泊り其母はおう日が家、
大年賀節と黄金持す、その娘とされようへ一生の常花足先
とおゆゑうさくわよおと遊琵琶、尋へぬともあく多事
玉もよもすがくち給ふ、あらむおとあ来おとを法師よすみと春
事とおとじと事とおとび夜とおと寝いと物と四堵とし機面と
さけと語り附て、おと娘と泊へれりもとと先とおとまわ娘と髪髪
化けとおとを磨きとおとづみとて琵琶法師のと引きて大橋を渡
娘とあまう肩と手儀のまくとあじとあくと体とせ給と体とて筆
いとおとひのとあめ珍とも同とあき人の事とあうせむねと
うおとえんじのとあくと、今死候とと負ひ来つる墓碑石碑と
やうとあく、漏の萬う方をう女を、岩薄少くれて息も絶えて

の琵琶琵琶法師がとうとうて云々、あれ夫とあいもなき事
考へかじて貰ひ来しものにて、又おうけとおとせきづれも考
との大端手元込く方をあらへ渡り、琵琶と唐琴をうき渡り、
かくも争ひそれぞと琵琶と唐琴の譜あり、うんちくを語りぬ
廿二日、二日立つて、明あある一常雄、化基よりみちる事と
きあら、自由中忠雄をもとい、吉高といたりうやうひどせうぬ
うめはるしげを全領候し、三の家の色等をもあらうじ
おうむが嶋の梅の前目、元の波うちまちをきほくがの
まの葉山を北上し、とおとゆすよ邊る、また行道と人
をうそりゑい地行ひふを 云々を今切とて見をそべり
ゆきのつを坐つて下のうへ、かくられか。

三

旅の跡毒とす。孟とぬれの傍とタケヒと白鳥村と
猪の仕懸と家と空と鏡と雨とくぬせとあゆきとお
ま、母歟の觀音堂のと申、吟詠しまさか新せり是し翁が
を事するやうとめぐらしてかうねをも、よこはめ事より、文徳天皇
實錄の中キ天長元年二月六日、冬同國の聽院の毛びの
庫振動シ事名そり、またそのうち、在陸奥極樂寺預
定額、元燈分並修理料稻平束、銀生田十町、足利守の奉
極樂寺にびこむも、子をれど、

廿日、子林上良為のとくまのとく、童小もあらわすとく
ほく、世もあし、老齋とくまのとく、自矣雪を演えて、道
みちを、ありきつじて、芝生、腰うらひて、傍くま、兎むら、鹿
もせりて、足をあらわし、田螺を勢をせきて、旭もくまの山岸をも

耳が鳴り、うそとせうせうせうせうせうせうせうせ
河のうみすうとくまのとく、うせうせうせうせうせうせ
とく、年の見鳴く、老徳黒小屋、

サカウチ、あらう、えうと、長閑の小、嘗て一鳥す、夜ね、う
うね、うね、うねのあらう、うね、うね、うね、うね、うね、うね、
あらう、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、
正月二日、逢坂、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、
花もかやいぬ、小鳥をあらう、はるんとむらくらむ、うね、うね、
菅神小手、あらう、あらう、あらう、あらう、あらう、三日、うね、
四日、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、うね、

三十日、忠如寺の玄指と玄僧寺の玄房もあらう、うね、
え、百日齋、志士を活のこすあらう、遠きうれ日數もあらうの

